

お茶の水女子大学創立150周年記念シンポジウム

イノベーションはどのように創られるか

「お茶の水女子大学の歴史から考える」

● 基調講演

「ジェンダー格差・文化的位相・変容する世界にイノベーションを」

佐々木泰子

お茶の水女子大学長

● 発表1

「ふるまいはあいだに生まれる」

塚本由晴

東京科学大学院環境社会理工学院教授／アトリエウン共同代表

● 発表2

「Shared Space・間のデザイン」

藤山真美子

お茶の水女子大学共創工学部准教授



お茶の水女子大学



# IGI

Institute for Gendered Innovations  
Ochanomizu University

創立150周年記念シンポジウム  
イノベーションは  
どのように創られるか  
お茶の水女子大学の歴史から考える

ジェンダー・イノベーション研究所は、全ての人のウェルビーイングを実現するイノベーションの創出を目指しています。お茶の水女子大学の創立150周年を記念して開催する本シンポジウムでは、本学の卒業生で女性総長就任1号といわれる、浜口ミホ氏のダイニングキッチンに焦点を当て、ジェンダー・イノベーション視点から考察し、イノベーション創出の課題を明らかにしていきます。

2025.05/09  
15:00-17:00 [金]

対象：一般公開（参加費無料）  
会場：お茶の水女子大学  
共通講義棟2号館2階201室

第1部：基調講演  
お茶の水女子大学長  
佐々木節子  
「ジェンダー・格差・文化的伝統・  
変容する世界にイノベーションを」

第2部：パネルディスカッション  
東京理科大学学長 阿部浩之 / アソシエイト学長 堀本由緒

お茶の水女子大学客員  
藤山真美子  
お茶の水女子大学長  
佐々木節子

モデレーター：お茶の水女子大学理事・副学長  
エズダマ・イノベーション研究推進室  
石井クワン子



主催 | ジェンダー・イノベーション研究所 (IGI)  
連絡先 | ocha-igi@cc.ocha.ac.jp

参加登録  
フォーム



お茶の水女子大学 創立150周年記念シンポジウム

イノベーションはどのように創られるか

〜お茶の水女子大学の歴史から考える〜

日時 2025年5月9日（金） 15時〜17時

場所 お茶の水女子大学共通講義棟2号館2階201室

対象 一般公開

主催 お茶の水女子大学

ジェンダー・イノベーション研究所

# 目次

## はじめに

石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／

ジェンダード・イノベーション研究所長）

## 第1部 基調講演

「ジェンダ―格差・文化的位相・変容する世界にイノベーションを」

佐々木泰子（お茶の水女子大学長）

- ❖ 創立150周年、お茶大から発信するイノベーション 9
- ❖ お茶の水女子大学「ジェンダード・イノベーション研究所」について 10
- ❖ ジェンダード・イノベーションが生み出す可能性 11
- ❖ 「お茶の水女子大学」創立は女子教育のイノベーションだった 12
- ❖ 時代のトップを行く教育内容 14
- ❖ 「日常性」の中の浜口ミホ 17
- ❖ テレビドラマに見る「彼女たち」の生きた時代 19
- ❖ 浜口ミホを育んだ教育環境 20
- ❖ 住宅から女性の立場の民主化を促した『日本住宅の封建制』 21
- ❖ 女高師から世界に羽ばたいていった女性たち 24
- ❖ 女高師に「家事科」が置かれた意味 26

❖ 生活的価値は「科学的研究」に立脚しなくてはならない 29

❖ 産官学の連携で革新的なダイニングキッチン誕生 30

❖ イノベーションが生まれるために必要なこと 31

❖ 未来は予測できないが、未来に「つなぐ」ことで何かが起こせる 33

第2部

発表1 「ふるまいはあいだに生まれる」 38

塚本由晴（東京科学大学大学院環境・社会理工学院教授／

アトリエ・ワン共同代表）

発表2 「Shared Space・間のデザイン」 52

藤山真美子（お茶の水女子大学共創工学部准教授）

閉会挨拶

加藤美砂子（お茶の水女子大学理事・副学長）

おわりに

石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／

ジェンダード・イノベーション研究所長）

（参考）お茶の水女子大学&ジェンダード・イノベーション研究所

創立150周年記念事業コラボレーション企画

はじめに

## 石井クンツ昌子

お茶の水女子大学理事・副学長／  
ジェンダード・イノベーション研究所長



本書はお茶の水女子大学創立150周年を記念して2025年5月9日に開催されたシンポジウム「イノベーションはどのように創られるか」お茶の水女子大学の歴史から考える」の記録です。

本学は1875年に女性のための日本初の官立高等教育機関「東京女子師範学校」として開学し、以降、様々な分野で学んだ卒業生たちが国内外で活躍しています。例えば、1927年に日本人女性で初めて博士号を取得した保井コノさん、1931年に卒業し、フランスを拠点として国際的に活躍した日本初の女性原子核物理学者の湯浅年子さんがおられます。しかし、本シンポジウムにおいてご紹介した浜口ミホさんの名前を聞いたことがある方は少ないのではないかと思います。

浜口ミホさんは1933年に東京女子高等師範学校家事科に入学して、卒業後には建築の勉強をするために東京帝国大学建築学科の聴講生になられた方です。そして、その後、1954年には日本初の女性一級建築士になられて、著書『日本住宅の封建制』によって、社会に大きなインパクトをもたらし、ステレンレス製のシステムキッチンを開発してダイニングキッチンの誕生に多大な貢献をなさり、キッチン革命を起こした建築家と評価されている方です。

この浜口ミホさんをイノベーターとして捉え、特に、お茶の水女子大学に2022年に開設された

ジェンダード・イノベーション研究所が注目するジェンダー差や性差視点を取り入れながら、浜口ミホさんの社会的な貢献を理解することを目的のひとつとする基調講演を佐々木泰子学長からいただきました。

佐々木学長の講演では、まず創立150周年を迎えるお茶の水女子大学の文理融合と少人数教育、女性研究者育成、理工系女性教育などの紹介がありました。そして本学に開設したジェンダード・イノベーション研究所についてご説明いただき、イノベーションによるアウトカムとして、新しい製品につながることで、人間のウェルビーイングを促進するデザインにつながることで、新市場とビジネスチャンスにつながることで、多様なユーザーグループのニーズを満たすことで、グローバル競争力や持続可能性を強化することについてのお話をいただきました。さらに浜口ミホさんをジェンダード・イノベーターとして捉えて、浜口さんの経験からイノベーションが生まれるために必要なこととして多様性、良き指導者の存在と学びの環境、理解者・協力者・仲間が存在があり、社会における共同体としての責任を挙げておられます。

佐々木泰子先生からのお話にもありましたように、佐々木先生と浜口ミホさんとの「出会い」は2022年にリノベートされた浜口さん設計の住宅「津田山の家」を通してでした。現在東京科学大学の教授である塚本由晴先生はその改修にご尽力された方で、本シンポジウムにご登壇いただくことをご快諾いただきました。お茶の水女子大学共創工学部の准教授であり建築がご専門の藤山真美子先生にもご登壇をお願いしました。各登壇者には浜口ミホさんやご自身の研究などについてのお話をいただきました。その内容は本書にも掲載していますが、建築を専門としていない方々にも大変わかりやすくかつ示唆に富んだものでした。

お茶の水女子大学が創立150周年を迎える年に、このような教育の歴史や育っていった方々の偉大な活躍を、本学の卒業生の皆様だけでなく広く社会へ発信できたことで大きなインパクトを残したシンポジウムを開催できたと思っております。ご参加いただいた皆様の中には浜口ミホさんの授業を履修された方もいらっしゃり、浜口さんに焦点をあてた講演会開催を喜んでおられるなど、主催者にとっても嬉しいシンポジウムとなりましたことをご報告いたします。

お忙しい中、ご参集いただきました皆様には心より感謝しております。



## 第1部 基調講演

### 「ジェンダー格差・文化的位相・変容する世界にイノベーションを」

佐々木泰子 お茶の水女子大学長



本学における家事学の歴史とジェンダード・イノベーションの視点から浜口ミホのダイニングキッチンのデザインを考察するプロジェクトを主導し、本シンポジウムの創立150周年記念事業としての開催を提案。



図1

皆さま、こんにちは。お茶の水女子大学の佐々木です。本日は大勢の方がご参加くださり、とてもうれしく思っています。ありがとうございます。

2025年、お茶の水女子大学は創立150周年を迎えます。その歴史を振り返る中で、さまざまな卒業生が紹介される機会も増えていきます。保井コノさん<sup>\*1</sup>、黒田チカさん<sup>\*2</sup>、辻村みちよさん<sup>\*3</sup>のお名前を耳にしたことのある方はかなりいらっしゃると思います。本日はご紹介する浜口ミホさん<sup>\*4</sup>に関して、ご存知ない方も多いのではないのでしょうか。実は、私自身も、浜口ミホさんという方が本学にいらしたことを偶然知り、150周年のこの機会に、ぜひご紹介したいと考えました。

また、2022年に開設したジェンダード・イノベーション研究所は、この三年間、石井研究所長のもと、さまざまな活動を行い、高い評価をいただいていますので、研究所の活動についてもご紹介したいと考えております。

本日のシンポジウムのタイトルは「イノベーションはどのように創られるか」お茶の水女子大学の歴史から考える」です。現在、学内外において、大学を教育・研究の場としてだけでなく、イノベーション創出の場としようという機運が高

\*1 保井コノ(やすい・この) 1880-1971  
[https://www.lib.ocha.ac.jp/06/yasui\\_kono.html](https://www.lib.ocha.ac.jp/06/yasui_kono.html)  
 \*2 黒田チカ(くろだ・ちか) 1884-1968  
[https://www.lib.ocha.ac.jp/06/kuroda\\_chika.html](https://www.lib.ocha.ac.jp/06/kuroda_chika.html)  
 \*3 辻村みちよ(つじむら・みちよ) 1888-1969  
[https://www.lib.ocha.ac.jp/06/tsujimura\\_michiyo.html](https://www.lib.ocha.ac.jp/06/tsujimura_michiyo.html)  
 \*4 浜口ミホ(はまぐち・みほ) 1915-1998

まっています。そこで、本日は、「ジェンダー格差・文化的位相・変容する世界にイノベーションを」というテーマで、共にイノベーションの創出を目指して、新たな挑戦をしていきましょう、というお話をさせていただきたいと思ひます。

スライドの写眞は、浜口さんが学んでいた頃、昭和9年から10年代の東京女子高等師範学校の様子です。学生が割烹着を着ていることを頭の隅に留めておいていただきたいと思います（図1）。

#### ❖ 創立150周年、お茶大から発信するイノベーション

まず、イノベーションの三つの課題、「ジェンダー格差」「文化的位相」「変容する世界」についてお話します。

一つ目の「ジェンダー格差」については、ジェンダーギャップ指数（GGI）に目を向けると、日本の下位定着は目を覆うばかりの状況です。さらに近年、国内総生産（GDP）が低迷し、経済成長の停滞が深刻な問題になっています。私が入学した50年前、日本は右肩上がりの時代で、今、ここにいらつしやる学生さん達とは違う経験をしたのではないかと思ひます。その後、「失われた30年」を経て現在は経済成長が停滞り、女性の社会的な活躍も後れているといわれています。

続いて、「文化的位相」についてですが、グローバル化した世界では、定型化に伴う国や地域、社会、個人間の軋轢が深刻な問題となります。実際、各地で起こっている紛争の報道を見聞きしない日はないくらいです。その解決の力となるものは、それぞれに内包されている時間軸の違いであり、それが識別されるべき文化的位相だと考えています。

第三の「変容する世界」については、フランスの歴史学者フェルナン・ブローデルの学識を以つて

しても解明しえていません。未来に関わる問いは、私たち自らが、特に若い方が対処していくしかありません。その最たる例は、人工知能（AI）などの文理融合を要するテーマで、正に新たなイノベーションが求められています。

#### ❖ お茶の水女子大学「ジェンダー・イノベーション研究所」について

ここで、ジェンダー<sup>\*5</sup>・イノベーション研究所についてご紹介します。先ほど申しましたように、2022年に開設され、三年が経過しました。

お茶の水女子大学は、「ジェンダー・イノベーションによって、性別によらず、すべての人びとにとってウェルビーイングな社会実現のための、アジアにおける連携拠点となる」ことを大学ビジョンとして掲げています。私のキーワードの一つは、「世界中の人びとのウェルビーイング」です。

「ジェンダー・イノベーション」は、2005年にスタンフォード大学のロンダ・シービング教授によって提唱されました。性差ジェンダー差、そして交差性に着目した分析によって、新しい価値やイノベーションの創出を目指しています。お茶の水女子大学は2022年に、ジェンダー・イノベーションに取り組む、日本初の研究所であるジェンダー・イノベーション研究所を設立しました。

本学が1975（昭和50）年に女性文化資料館を設立し、長らく日本のジェンダー研究の核を担ってきたことをご存知の方も多と思います。

そして、お茶の水女子大学にジェンダー・イノベーション研究所が設立されてからという

\*5 お茶の水女子大学ジェンダー・イノベーション研究所 Web サイト  
<https://igi.cf.ocha.ac.jp/>

もの、ジェンダード・イノベーションの知名度は大いに高まりました。シーピンガー先生からも「ジェンダード・イノベーションの領域で日本が成しつつある進展を楽しみに見守っています。特に、お茶の水女子大学のジェンダード・イノベーション研究所は、産学交流の新しい道を開きつつあります。」<sup>〔1〕</sup>という評価をいただいています。

今やジェンダード・イノベーションによるジェンダー平等が国際戦略になっていると言っても過言ではありません。スタンフォード大学の Gendered Innovations プロジェクトには、欧州連合（EU）の欧州研究開発フレームワークやホライズン2020、米国立科学財団（NSF）などが参画しています。日本でも「第5次男女共同参画基本計画」や「第6期科学技術・イノベーション基本計画」、「女性版骨太の方針2024」においてジェンダード・イノベーションが推奨されています。

#### ◆ ジェンダード・イノベーションが生み出す可能性

ジェンダード・イノベーション研究所ではどのような活動がされているのかについて、学内にもご存知ない方がいらつしやるのではないのでしょうか。

産学連携で社会連携講座を行い、学生の皆さんのキャリア形成に寄与しています。5月30日には富士通とのジョイントで、同社の女性研究者をお招きし、ディスカッションを行います。三井不動産との包括的連携協定も締結しました。さらに、オンラインでセミナーや産学交流会、企業向けワークショップ、学術指導など、学内外でさまざまな活動を行っています。それを率いているのが石井研究所長です。

では、ジェンダード・イノベーションにはどのような可能性があるのでしょうか？スタンフォード

大学のホームページから引用して紹介します。

まず、ストラテジー（戦略）として、「女性やマイノリティーの数を増やしましょう」「ジェンダー平等に向けて研究組織を変革していきましょう」「研究開発にジェンダー視点を取り入れましょう」という三つのプロセスがあります。

本日は浜口ミホさんを取り上げますので、特にエンジニアリングに関するイノベーションが成されどどのようなことが起こるのかということにも触れておきたいと思いますが、次の5点が挙げられています。

- ・新しい製品、プロセス、インフラストラクチャ、サービスにつながる。
- ・男女平等をはじめ、人間の幸福を促進するデザインにつながる。
- ・新しい市場とビジネスチャンスを明らかにする。
- ・複雑かつ多様なユーザーグループのニーズを満たすテクノロジーを開発する。
- ・グローバル競争力と持続可能性を強化する。

本日の講演を通して、皆さんがこういったことを感じ取ってくださったら、本日のシンポジウムは目的を達成したと言えるのではないかと思います。

❖ 「お茶の水女子大学」創立は女子教育のイノベーションだった

お茶の水女子大学は、1875（明治8）年に、日本初の、女性のための官立高等教育機関、東京

女子師範学校として創立されました。この「師範学校」が一つのキーワードになります。教員を養成する学校として設立されたことが、さまざまな意味で、その後の本学の歴史に影響を与え、明治維新以降、日本の女子教育をリードすることになりました。

本学の設立には、明治政府だけでなく、明治天皇の皇后、昭憲皇太后も関わっていらつしやいました。創立の時から女性のまなざしがあつたということは、やはり素晴らしいことだと思います。

昭憲皇太后は女子教育にとっても熱心な方で、東京女子師範学校の開校式にもご臨席されました。その時にご下賜された令旨には、女子師範学校の設立をとても喜んでいること、これを機に日本で女子教育が広がっていくことを期待するということが書かれています。また、皇太后から賜った「みがかずば 玉もかがみもなにかせん 学びの道もかくこそありけれ」という御歌は本学の校歌になりました(図2)。

現在のお茶の水女子大学は小規模ながら総合大学です。この「総合」という言葉が非常に大きな意味を持っています。1949(昭和24)年に国立学校設置法の公布によって、東京女子高等師範学校から新制国立大学になる際、師範の大学になるのか、総合大学になるのかを巡ってさまざまな議論が行われた末、総合大学となる道が選ばれました。

図2

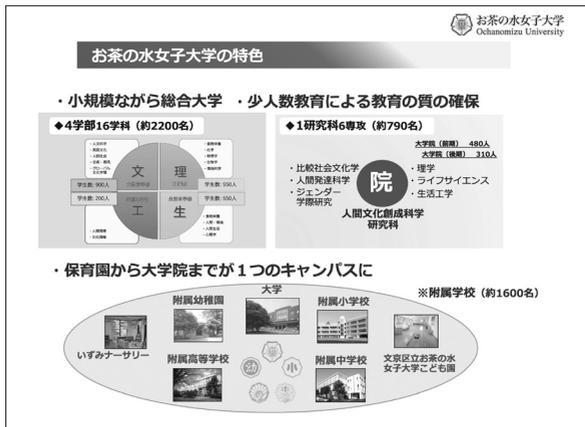


当初は文学部と理家政学部の一学部でした。1950（昭和25）年に文教育学部、理学部、家政学部の三学部となり、その後、家政学部は生活科学部に改組されました。そして、皆さんご存じのとおり、昨年、共創工学部が新設され、現在は四学部となっています。大学院は一研究科、六専攻で、約八百名の学生が在籍しています。小規模ではありますが、それも本学の魅力だと考えています。例えば、少人数教育によって教育の質が担保されるという側面があります（図3）。

本学のもう一つの特徴は、保育園から大学院までが一つのキャンパス内にあることです。附属学校園を持つ国立大学はいくつかありますが、それらが全て同じキャンパス内にあるのは本学だけです。同じ空気を吸い、生活を共にすることにはやはり意味があり、さまざまな形での交流が生まれます。「同窓会、桜蔭会も」と申し上げたいところですが、残念ながらキャンパス内ではありません。しかし、大学の正門横の国際交流留学生プラザに同窓会コモンズというスペースがあり、母校のすぐ近くで活動をしています。

### ❖ 時代のトップを行く教育内容

お茶の水女子大学の教育の特徴の一つは、徹底した文理融合と少人数教育です。たとえば、文理融





合リベラルアーツ、複数プログラム選択履修制度、グローバル教育、キャリアデザインプログラムなど、さまざまなプログラムが用意されています。学生の皆さんには、これらのプログラムを上手に使用して、四年間の学部生活、そして大学院生活を過ごしていただきたいと願っています。

続いてご紹介するのは、本学が誇る女性研究者育成の取り組みです。

本学は、女性教員比率が47%で、国立大学の中でトップレベルです。半数近くが女性教員である国立大学はあまりなく、ほとんどが20%を切っているのではないのでしょうか。実はつい最近まで本学がトップでしたが、現在は僅差で2位になっています。

さらに、理系をはじめとする全ての学部で、女性研究者育成のための取り組みを展開しています。現代は、女性の社会進出を推進し、女性にとっても男性にとってもウエルビーイングな社会にしていきたいことが目指されています。本学はそれを大学の目標として掲げて様々な取り組みを行っています (図4)。

また近年、理工系人材、中でも女性の理工系人材が一層求められるようになってきました。本学の理系女性育成啓発研究所では、大学生だけではなく、女子中高生のためのセミナーを開催

\* 6 お茶の水女子大学理系女性育成啓発研究所 Web サイト  
<http://www-w.cf.ocha.ac.jp/cos/>

**お茶の水女子大学理学系女性育成啓発研究所**

2015年4月 文部科学省国立大学改革強化推進事業として奈良女子大学と連携して理学系女性教育開発共同機構を設置

2022年4月 お茶の水女子大学理学系女性育成啓発研究所を設置

第4期中期計画の教育改革のために新設した組織である総合開発研究機構に属する研究所となる

女子中高生のためのイノベーション入門冊子

理学系女性ロールモデル集

情報系プログラム

- 女子中高生向けの取組
- 保護者・教員向けの取組
- 附属学校と連携した取組
- 中高生向け冊子の作成と配布
- 情報系教材の開発

「夏がっほ、サイエンスの世界」

http://www.w.cf.ocha.ac.jp/ose/

2023年度「SDGs実践」

参加数：31件  
参加者数：1010人  
満足度：90.5%  
理学系学部への関心の高まり：95.8%

的課題の解決を両立する人間中心の社会」の実現に向けての取り組みを前進させ、人間中心の社会に向けたイノベーションを推進できる女性人材の育成を目指しています（図6）。

これからお話しする浜口さんが生きた時代もそうで

したり、イノベーション入門の冊子や理学系女性ロールモデル集を作成したり、情報系プログラムを開発したりするなど、さまざまな活動を行っています（図5）。

共創工学部についてもご紹介しておきます。SDGsや多様性を包摂する社会を実現するためには、女性の参画が不可欠です。データサイエンスの基盤の上に、工学の知識や技術を文系の知と協働させることで、<sup>＊8</sup>Society 5.0（サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムによる、経済発展と社会

共創工学部についてもご紹介しておきます。SDGsや多様性を包摂する社会を実現するために、女性の参画が不可欠です。データサイエンスの基盤の上に、工学の知識や技術を文系の知と協働させることで、<sup>＊8</sup>Society 5.0（サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムによる、経済発展と社会

**共創工学部**

お茶の水女子大学  
Ochanomizu University

**Power of Diverse Thinking**

SDGsや多様性を包摂する社会を実現するには、女性の参画は不可欠です。データサイエンスの基盤の上に、工学の知識や技術を文系の知と協働させることで、Society 5.0への取り組みを前進させ、人間中心の社会に向けたイノベーションを推進できる女性人材の育成を目指します。

人間理工学科 × 情報理工学科

工学知

OUTCOME: モノづくり・コトづくりによる社会発展

IMPACT: SDGsや多様性を包摂する社会を実現

多様な視点  
専門性  
協働  
創造力

マルチセンサを利用したデジタル環境制御装置設計実習演習

2学科の目指すもの  
工学×社会科学の協働によるSDGsの達成  
工学×人文学の協働による新しい文化の創成

大衆生活の工業化時代は終わり、ものづくりの高いクリエイティビティが求められます。新学部ではアウトカムを通じて社会実装を目指します。共創には、文理の共創、社会との共創の両方が求められています。両学科が連携して教育を行うことで、多様性志向に基づく新しいクリエイティブ人材を養成します。

＊7 お茶の水女子大学共創工学部 Web サイト  
<https://www.te.ocha.ac.jp/>

＊8 内閣府 Web サイト「Society 5.0」  
[https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/)

したが、現代でも私たちは社会と切り離されて何かを成すことはできません。ですから、社会が求めていることに取り組み、社会に求められる人材を輩出していくことは、大学などの教育機関の使命であると考えています。共創工学部はまだ設置されたばかりですが、これから大きく成長していくことを期待していますし、皆さんにも応援していただきたいと思っております。

#### ❖ 「日常性」の中の浜口ミホ

ここからは、『日常性』の中の浜口ミホということ、ジェンダード・イノベーターとしての浜口ミホさんについてお話ししたいと思います。

近年、北川圭子氏<sup>(2)</sup>、上田佳奈氏<sup>(3)</sup>、ノエミ・ロボ氏<sup>(4)</sup>ら、学外において、建築家としての「浜口ミホ」が再評価されています。

これらの方々が、キッチン革命を起こしたといわれる浜口さんについて書かれたものを読み、そこでは触れられていない本学とのかかわりについてお話ししたいと思います。私は生活や建築に関する研究者ではありませんが、学長として本学の150年の歴史を振り返り、東京女子高等師範学校における家事学（家政学）の学びを切り口として、ジェンダード・イノベーターとしての浜口さんを現代に蘇らせ、イノベーション創出のための示唆を得たいと考えました。

浜口さんは、日本の女性建築家第一号となり、『日本住宅の封建制』<sup>(5)</sup>という著書によって、社会に大きなインパクトを与えました。この本の中で、浜口さんは、家庭内における身分の上下関係によって虐げられていた女性の側から、日本住宅の封建制を指摘しています。そして、住宅公団と共同でステンレス製のシステムキッチンを開発し、ダイニングキッチンの誕生に貢献しました。それはキッチン

ン革命にとどまらず、家庭における女性の地位向上、メン  
バーの対等な関係性の構築という近代的家意識の醸成に寄  
与するものであったと考えられます。

このように考えたのは私だけではありません。「ステ  
レス流し台によって、台所は一転してピカピカ光る家の中  
で『一番美しい』場所に変身した』という指摘もあります。<sup>⑥</sup>  
浜口さんは、不平等を発見して集合的バイアスを指摘し、  
住宅設計を通して、平等な社会を実現させるためのマニ  
フェストを提示し、ダイニングキッチンを普及させること  
により社会変革を起こした人物として評価されています。

NHKの「プロジェクトX〜挑戦者たち〜」の「妻へ  
贈ったダイニングキッチン〜勝負は一坪・住宅革命の秘密  
〜」(2000年5月2日初回放送)では、浜口さんが取  
り上げられました。再放送もされましたので、ご覧になっ  
た方もいらっしゃるかもしれません。そして、テレビ朝  
日系で近年放送されたスペシャルドラマ「キッチン革命」  
(2023年3月25日・26日)の主人公のモデルの一人は  
浜口さんです。このように、学外では取り上げられていま  
すが、学内での認知度は少々寂しいように思われます。

同時代人の比較年譜

年	浜口三栄	三浦昌子	土浦信子	(備考)
1900	明治33		生まれる (母姓 父 吉野作蔵)	津田梅子 女子英学設立
1913	大正2		小学校卒業、東京女子高等師範学校附属高等女子校入学	黒田チヨ、牧田チヨ、東北帝国大学理化学
1914	大正3	生まれる (シンガポール)		
1915	大正4	生まれる (大連)		
1919	大正8		東京女子高等師範学校附属高等女子校卒業、アサヒクラブ 土浦編輯・結婚	中野たけが、生まれる
1922	大正11			
1923	大正12		アサヒ・日仏・日米建築事務所勤務	第1 巨匠藤村人子、榎東大直史
1927	昭和2			保月ユキ 初の女性理字博士
1932	昭和7		東京女子高等師範学校附属高等女子校卒業	
1933	昭和8	東京女子高等師範学校実習科入学		
1935	昭和10	明治大学法学部入学		
1937	昭和12	東京女子高等師範学校実習科卒業		
1938	昭和13	東京帝国大学建築学科特許生	明治大学法学部卒業、高等試験司法科試験合格	
1939	昭和14	前川国男建築設計事務所入所		女優藤志貴直章官舎設計
1940	昭和15		日本初の女性弁護士 相田芳夫と結婚	
1941	昭和16	新日本住宅建設		大平深庵争闘戦
1945	昭和20			経戦、婦人参加権議決案(参議院内閣)
1946	昭和21	相田芳夫戦死		日本監禁志願会 日本監禁志願会
1947	昭和22			お茶の水女子大学 (新制大学) 発足
1950	昭和25	『日本住宅の封建性』		
1952	昭和27		初の女性理事	
1954	昭和29	初の女性一級建築士免許		
1956	昭和31	公開住宅「モントシシステム」開所、住居協議	三浦乾太と再婚	第1 巨匠世界人類学協会会長
1972	昭和47		初の女性家賃高利貸長	
1975	昭和50			
1984	昭和59		死去 (69歳)	経野文子 制定、女性文化資料館設置
1985	昭和60			男女雇用機会均等法公布
1988	昭和63	死去 (73歳)		
1998	平成10		死去 (88歳)	

## ◆ テレビドラマに見る「彼女たち」の生きた時代

まず、浜口さんが生きた時代について考えてみたいと思います。

浜口さんは1915（大正4）年に大連で生まれました。同年代には、他にも何とか自分の道を見つけ出そうとしていた女性たちがありました（図7）。

その中の本学関係者には、NHK連続テレビ小説の「虎に翼」の主人公のモデルになった女性裁判官第一号の三淵嘉子<sup>\*9</sup>さんがいます。彼女は浜口さんよりも1歳年上です。三淵さんは、東京女子高等師範学校附属高等女学校を卒業し、明治大学の法学部に入学しています。浜口さんも三淵さんも、第二次世界大戦前後の戦いの時代を生きた人です。

他にも、1900（明治33）年に生まれた建築家、土浦信子<sup>\*10</sup>さんも東京女子師範学校附属高等女学校の卒業生です。この方の夫は土浦亀城<sup>\*11</sup>という有名な建築家でした。彼女は志賀高原の本学の宿泊施設の設計を最後に、建築家としての活動から身を引きました。当時の建築業界は男性優位が根強く、自分が夫と同じ職場で働くことに配慮したと言われています。<sup>(7)</sup>

同じ時期に、同じ環境で学んだ女性たちがそれぞれ頑張っていたのです。ちなみに、NHK連続テレビ小説「あんぱん」の主人公、やなせたかし<sup>\*12</sup>さんは、1919（大正8）年生まれで、彼女たちと同時代を生きた人です。

\*9 三淵嘉子（みぶち・よしこ）1914-1984

\*10 土浦信子（つちうら・のぶこ）1900-1998

\*11 土浦亀城（つちうら・かめき）1897-1996

\*12 やなせたかし 1919-2013

❖ 浜口ミホを育んだ教育環境

では改めて浜口さんの受けた教育について見ていきたいと思えます。

浜口さんは、1933（昭和8）年に東京女子高等師範学校家事科に入学して、市浦健<sup>\*13</sup>の指導を受けました。市浦は後に有名な建築家となり、住宅営団課長になった方です。

市浦は、東京女子高等師範学校と附属高等女学校で「住居」という科目を担当していました。授業の中で、生徒に自宅の間取りを描かせたところ、浜口さんは、驚くほど大きな家を描きました。それで、彼女が中国大連の高官の娘だと知ったというエピソードがあります。浜口さんは、社会的・経済的地位の高い家庭で生まれ育ったのです。

浜口さんは、東京女子高等師範学校を卒業後、愛媛県の高等女学校の教師として就職しますが、一年で辞めて、東京の実家に戻り、両親に「建築の勉強をしたい」と懇願します。当時の師範学校は、卒業後に一定期間教職に就くことを前提として、授業料は無料でした。それで、浜口さんは、父親に授業料を払ってもらってその義務を免除してもらい、東京帝国大学建築学科に聴講生として入学しました。

しかし、そこで彼女は、ガラスの天井あるいは、「Broken Rung（壊れたはしご）」を経験したのではないかと思えます。<sup>(8)</sup> 梯子を登っていったところ、その梯子が壊れていて先に進めないという状況です。彼女は勉強したいという強い気持ちをもって入学しました。また、家庭からの創造文化資本と学歴資本を継承する社会環境、すなわちフランスの社会学者ブルデューが述べた、「再生産」に寄与する「文化資本」と「社会関係資本」に恵まれていたことは間違いありません。

\*13 市浦健（いちうら・けん）1904-1981

にもかかわらず、「聴講生」という立場であったがために、様々な制約を受け、試験を経験することになりました。

そんな浜口さんに転機が訪れます。1939（昭和14）年、前川<sup>\*14</sup>國男建築設計事務所に入所します。前川は、東京帝国大学建築学科を卒業後、ル・コルビジエに師事した建築家で、代表作に東京文化会館があります。事務所の同僚には丹下<sup>\*15</sup>健三がいましたし、岡本<sup>\*16</sup>太郎とも知り合います。そのような環境の中で、彼女は建築を学び、研鑽し、力を蓄えていきます。そして、入所の2年後、同じ事務所に在籍していた浜口<sup>\*17</sup>隆一という著名な建築家と結婚します。

浜口さんは、結婚後も活動を続け、お茶の水女子大学が新制大学としてスタートした1949（昭和24）年には、『日本住宅の封建制』という本を出しました。そして、1954（昭和29）年、日本初の女性一級建築士になります。彼女は生涯、住宅を専門とし、千軒ほどの家を建てたと言われています。その背景には、当時は、女性には大きな建物に携わるチャンスがなかなか訪れなかったということもあつたのではないかと思えます。

#### ◆ 住宅から女性の立場の民主化を促した『日本住宅の封建制』（図8）

浜口さんの著書『日本住宅の封建性』は次のような構成になっています。

#### 序説 住生活様式の変革期

#### 1. 台所―生活空間の研究

\* 14 前川國男（まえかわ・くにお）1905-1986

\* 15 丹下健三（たんげ・けんぞう）1913-2005

\* 16 岡本太郎（おかもと・たろう）1911-1996

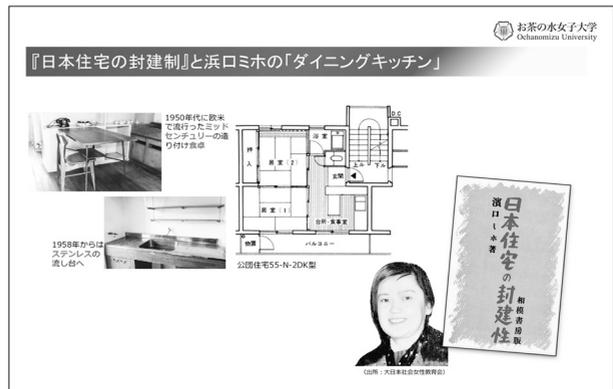
\* 17 浜口隆一（はまぐち・りゅういち）1916-1995

2. 農村住宅―住生活水準の研究
  3. 部屋の「日本的性格」―機能主義と格式主義
  4. 床の間追放論
  5. 玄関という名前をやめよう
  6. 生活水準の科学的研究
- 結語 封建的な住宅と近代的な住宅

私は何度も読み返し、戦後の変革期の渦中にあつてより良い「未来」を創造していこうとする浜口さんの姿勢に深い感銘を受けました。本日のシンポジウムのテーマに通じるものがあると思います。

ここで序文を紹介しますので、皆さんにもぜひ、彼女がどれほど熱い気持ちでこれを書いたのか、感じとっていただきたいと思っています。

現在私たちは、あらゆる生活様式について画期的な変革期にあります。ここ20年ないし50年のうちに、私たちの生活様式は著しく変ることとおもわれます。このことは生活様式の中のものとも重要な要素の一つである「住い」についても勿論いえます。ではそれはどのように変わつてゆくでしょうか？その方向はたとえ現在の私たちの知識にとつて判明しないとしても、決し



て偶然的あるいは恣意的なものではなく、さまざまの原因の織りなす必然的なものに違いありません。このような時にあたって、その必然的な方向が、せめてその大筋においてあらかじめ理解されていれば今後の現実の変革過程において、私たちは首尾一貫した実践をすることができて私たち自身のためにも、また私たちの後の世代のためにもよりよい実りをもたらすことができましょう。このような必然的な方向の探求と理解に多少なりとも貢献すること——これが筆者の研究の目的であります。

私たちの変革過程は、大掴みにいえば、封建的な段階から近代的な段階への進展ということが出来ます。

したがって私たちとしては、私たちの住生活様式における封建制がどうかといった事柄についての具体的な理解が必要だとおもいます。このためには私たちの住生活様式が封建社会の昔から、歴史的に形成されて現在にいたった道程、また私たちの社会が近代的な段階に入りこむにつれて、現れつつある諸変化などについての歴史的な分析研究が最も効果的な方法の一つであるようにおもわれます。

中でも変革の「必然的な方向」を理解することにより「私たちは首尾一貫した実践をすることができて私たち自身のためにも、また私たちの後の世代のためにもよりよい実りをもたらすことができましょう」という考え方に、教育に携わっている者として共感します。

続く本論では、昔にさかのぼり、住宅の歴史と変遷について述べています。

台所に関しては「貴族時代武家時代を通じてそれは日常召使のいるべき生活空間であった」。それ

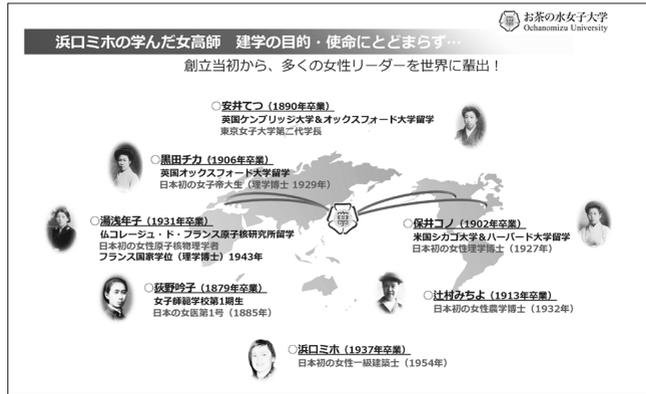
が1949年頃には「都市の棒給生活者で召使を雇っているのは比較的富裕な少数」となり、「したがって『主人家族』に属する者―『主婦』がこの召使たる台所で働かなければならない」と指摘しています。浜口さんはそのような状況を問題視し、「明るいゆたかな近代的な社会へ進んでゆきたいというのが、われわれ、特にこれまで虐げられてきた女性たちの心からの願いである」と述べています。

この著書を、後の研究者は「後世に残りうるような住居論に関する古典的名著」、「日本住宅の空間構成の中に内在する封建的身分秩序」『格式主義』を民主的家庭生活を求める立場から『機能主義』という言葉を用いて否定したものである。それは『家』のためにということから人間性発展のために、日本住宅の封建性と徹底的にたたかい、住空間の民主化を進める論理を明快に主張したもので、戦後の住宅革新の基本的方向を理論づけた」と評価しています。<sup>9)</sup>

少し肩に力が入り過ぎてしまいましたので、リラククスしていただくために、NHK連続テレビ小説「あんぱん」の第二話の話をしたいと思います。のぶちゃんの家では、ご飯を食べる時、祖父が上座に座っています。祖父が「お代わり」と言うと、母親が立ち上がり、茶碗を受け取りご飯をよそい「はい、どうぞ」と渡します。恐らく、現在の家庭では、このような風景は、ほとんど見られないのではないのでしょうか。それに対してやなせたかしさんの家では洋式で食事をしています。この家には、お手伝いさんがいますので、主婦が何かにつけて立ち上がる必要はありませんが、こちらもある意味、特殊な形です。どちらの家も、台所は食卓の近くにはなく、別の場所にあります。

#### ❖ 女高師から世界に羽ばたいていった女性たち (図9)

浜口さんが学んだ東京女子高等師範学校の建学の目的は教育者を育てることでしたが、それにとど



まらず、創立当初から多くの女性リーダーを世界に輩出してきました。世界で認められている卒業生がたくさんいます。

日本初の女性原子核物理学者であり、フランスで活躍した湯浅年子さんは1931(昭和6)年卒業。浜口ミホさんは1937(昭和12)年に卒業しているので、少し前の世代の方です。湯浅さんの更に先輩には安井てつさん、黒田チカさん、保井コノさんらがあります。彼女たちは海外に留学し、世界に羽ばたいていきました。

安井てつさんは、1897(明治30)年に英国に留学しています。興味深いことに、日本を出発するときと与えられた研究題目は教育学と家政学でした。しかし、当時のイギリスでは家政学は発達しておらず、授業を見学した程度だったそうです。

1902(明治35)年に家政学の研究のためにイギリスに留学した宮川寿美さんは、その後、東京家政学院を設立しました。

保井コノさんは、日本初の女性博士(理学)となった方です。1914(大正3)年にアメリカに留学した目的は、理科研究と家事研究でした。

黒田チカさんは、初めて帝国大学(東北帝国大学)に入学した女子学生です。1921(大正10)年から文部省外国留学生として二年間オックスフォード大学に留学しましたが、

\*18 湯浅年子 (ゆあさ・としこ) 1909-1980  
[https://www.lib.ocha.ac.jp/06/youasa\\_toshiko.html](https://www.lib.ocha.ac.jp/06/youasa_toshiko.html)  
 \*19 安井てつ (やすい・てつ) 1870-1945  
 \*20 宮川寿美 (みやがわ・すみ) 1875-1948

その目的は「家事ニ関スル理学ノ研究」でした。彼女は後に女性理学博士第二号となりました。1926（大正15）年に英国に留学した成田順<sup>\*21</sup>さんの留学目的は家事裁縫研究でした。後に文化女子大学長になりました。

科学史家古川安氏は、津田梅子<sup>\*22</sup>に関する著書の中で、このことについて、「女性は家事や栄養や食品に関する研究という留学目的なら認めるといふ、文部当局のジェンダー観を反映していた」と指摘しています。<sup>(10)</sup>確かにそういう側面もあったかもしれませんが、私はそれだけではないと考えています。当時の明治政府は、何においても外国、特に欧米に倣えというスタンスでした。優秀な人材が海外に出ていく際、欧米に比して遅れている家事教育について学ぶことも重要だと考えたのではないのでしょうか。

#### ❖ 女高師に「家事科」が置かれた意味

ここで、浜口ミホさんが学んだ東京女子高等師範学校家事科についてお話しします。

1875（明治8）年に東京女子師範学校が設立された当時の科目は、文法、地理学、史学、数学、物理学、博物学、生物学大意、化学、修身学、経済学大意、記簿法、書学初歩、手芸、唱歌、授業法でした。この中に手芸があることが一つのポイントです。本日、会場にいらつしやる本学の五十嵐悠紀准教授は、理学部情報科学科の所属ですが、手芸に関する研究もされています。また、現在、日本女性の間で刺繍がブームになっており、ジェンダー論の領域でも、さまざまな論文が書かれています。が、実は本学では明治8年から手芸の教育を行っていました。

そして、1897（明治30）年に文科と理科に分科し、1899（明治32）年には技芸科が加わります。

\*21 成田順（なりた・じゅん）1887-1976

\*22 津田梅子（つだ・うめこ）1864-1929

これが日本における家事専門教員養成の始まりでした。なぜこの科が創設されたのかというと、良妻賢母を育てるといふ大きな目的があったからです。良妻賢母には裁縫や食事の支度、食物などの知識が必要とされてきました。「この技芸科（後の家事科）を新設して文・理の2科と相対立させたのは、女子教育史上注目すべき事である。家事科が女子教育上緊要の一地位を占めることは言ふまでもない」と『東京女子高等師範学校六十年史』に書かれています。当時はそのような時代でした。

家事科では、裁縫、手芸、料理の実習がありました。しかし『六十年史』には「時間を費やすことの比較的多いに関らず、その効果の見るべきものは極めて少なかった。此は該科の根本的研究が未だなされず、改善を企てる者がほとんどなかったためである」とも書かれています。研究を行い、その研究をベースとして教育を行わなければならないということが、当時から強く意識されていました。そして1929（昭和4）年には、家事科の学科目改正があり、「住居」が初めて設けられました。この頃には「従来の技術教育に対し、理論的裏づけの必要が認識され徐々に研究、教育の体制が整備されていった」と言われています。

この年に東京女子高等師範学校の理科を卒業した折原さださん<sup>\*23</sup>という方が、1931（昭和6）年に、東京工業大学（現東京科学大学）の染料化学科に委託生として入学しました。浜口ミホさんは聴講生でしたが、彼女は東工大の女子学生第一号として受け入れられ、日本で最初の女性工学士となりました。彼女は女高師を卒業後、母校の家事科の専任教員となりますが、休職して東京工業大学で学び、その後、再び女高師家事科の専任教員となり、被服材料・被服整理に関する授業を担当しました。彼女は「母校が私に染料化学科を選ばせたのは、家政学の科学化が叫ばれている今日、多少なりとその方面に役立てたいと云う意図からではなかったかと、推

\* 23 折原さだ（おりはら・さだ）1908-1960

察して居ります」と謙虚に語っています。

当時の家事科では、前にも述べたように、市浦健という東京帝国大学工学部建築学科を卒業した建築家が「住居」の指導をしていました。

良妻賢母を育てるための教育を行いつつも、研究も行わなければいけないという、さまざまな事情がせめぎ合っていた時代であったことが何われ、現在の私たちに重なる部分があるようにも思われます。

図10

浜口さんが女高師の四年間の各学年で何を学んだのか、調べてみました(図10)。家事科は「家事専修」と「裁縫専修」に分かれており、彼女は前者でした。「裁縫」は、第一学年、第二学年では週七時間ですが、第三学年、第四学年では五時間に減っています。代わりに増えているのは「家事」です。この中に市浦の担当する「住居」という科目が含まれており、この偶然の出会いによって浜口さんは建築家になります。それから、第一学年、第二学年には「手芸」があり、編み物や刺繍を学んできますが、高学年ではなくなっています。これもとても興味深いことです。

当時の女高師家事科は、社会の要請にこたえつつ、最先端の研究成果を取り入れて教育課程に反映することによって変革を続け、さらには学生の自主性を尊重する教育環境であったと言えるのではないかと思います。

お茶の水女子大学  
Ochanomizu University

東京女子高等師範学校第六臨時教員養成所一覧 (自昭和10年至昭和12年)

学科目	第4学年1,2学期				3学期	内容
	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年1,2学期		
修身	2	2	2	2	—	
教育	2	2	3	4	実習30	文科に準ず
家事	2	4	7(4)	9(5)	—	織績及び織物 衣服整理法 食物及び栄養 科理法 住居 養老 育児 看護 家事 経済 家計簿記 家事概論
裁縫	7	7	5(4)	5(5)	—	和服裁縫 洋服裁縫
理科	6	6	4	—	—	生理学 物理学 化学 生理及び衛生 園芸 実験
図画	2	—	—	—	—	自在画 考案画
手芸	2	2	—	—	—	編み物 刺繍
外国語(英語)	3	3	3(1)	3(1)	—	
音楽	2	2	—	—	—	
体操	3	3	3	3	—	文科に準ず

\*1 第3,4学年 住居学 講師 市原健、\*2 第3学年学級主任 成田順 \*3 第4学年では家事専修

❖ 生活的価値は「科学的研究」に立脚しなくてはならない

ここで母校の講師となり、学生たちが目指すべきロールモデルとなった優秀な卒業生たちを振り返ってみます(図11)。

写真は、左上が保井コノさん、右上が黒田チカさん、右中が成田順さん、右下が折原さださん、そして卒業生ではありませんが、左下が、「住居」を担当していた市浦健です。浜口さんも七年間(1964年～1971年)、家政学部で講師を務めました。実は、先ほど、「浜口先生に教わりました」という方とお話することができました。

浜口さんは二年生を対象とする「住居学概論」を担当し、講義要項には「生活を包む住居が構築体として形成されるために必要な要素気候風土、社会経済家族材料技術工法等を自然科学社会科学工学の関連において考える」と記しています。読点が一カ所しかありません。この分野融合を主張する読点を用いない書き方から、私は、彼女が熱い気持ちで後輩の指導にあたっていたことが読み取れるように思います。

ここで日本における家政学がどのように変わっていったのかというお話をする予定だったのですが、時間がありませんので別の機会にゆずりたいと思います。一つだけお話ししておきたいと思えます。

図11



『日本住宅の封建性』の最後に「生活水準の科学的研究」という章があります。これは『女性線』という雑誌の入選論文を再掲載したものです（雑誌掲載時は「生活水準の科学的研究に就て」）。

その中で、浜口さんは、「住生活の分野においても、生活的価値の科学的研究に立脚して決定されなければならぬ」と指摘しています。本学が家政学部を改組して生活科学部を設置したのは1992（平成4）年でしたが、浜口さんは、既に1949（昭和24）年に、「生活科学」に言及し、「無能力となってしまった古い『家事学』に代って、われわれの家庭生活を管理してゆくために、科学的な基礎知識を提供するものであり、その意味においてそれは新しい『家事学』たらんとするものであるといえよう」と述べています。

#### ❖ 産官学の連携で革新的なダイニングキッチン誕生（図12）

ジェンダード・イノベーションの話に戻しましょう。

1950年～1955年頃の日本は第二次世界大戦後の住宅難の時代でした。戦後住宅政策の三本柱と呼ばれている政策があります。1950年の住宅金融公庫、1951年の公営住宅法、1955年の日本住宅公団です。

住宅難を解消するために、新しい住宅を造ることがマストであった官と明るい豊かな近代的社会の実現を目指す浜口さん、そこにサンウェーブという会社加わって、産・官・学の共創によりステ



レス流し台が製作されました。ステンレスを用いた流し台の大量生産は技術的に非常に難しいことだったそうです。浜口さんと産・官の人たちが協働して、三年間にわたって取り組んだ末に成功し、1956（昭和31）年に公団晴海台団地のダイニングキッチンに取り付けられました。このエピソードは先に述べたようにドラマ化されています。実際にダイニングキッチンを製造したサンウエーブという会社はその後統合されて、現在は株式会社TOTOとなっています。

ダイニングキッチンの誕生にジェンダード・イノベーションは、産官学の共創によるものでした。ですから、学生の皆さんには、自分の経験だけではなく、幅広くさまざまな人に会って知識を得てほしい。そして知識だけではなく、交流を通して融合し、そしてその結果生まれるのがイノベーションであることを知ってほしいと思います。

#### ❖ イノベーションが生まれるために必要なこと

浜口ミホさんの歩みから、イノベーションが生まれるために必要なことへの示唆が読み取れると思います。

第一にダイバーシティです。これは、両性の英知と努力の協働ということですが。当時の男性中心の建築界において、彼女は非常に稀な異質な存在でした。建築が専門の男性に混じり、台所仕事を担う女性を代表するだけではなく、東京女子高等師範学校家事科で生活、家族について学んだ女性であったということも大きかったのではないかと思います。ただし、彼女自身はあまり台所仕事をしていなかったようですし、母校の家事科についても古めかしいと批判していたようです。

第二に良き指導者と学びの環境です。実際に建築の指導をした市浦健、さらに、先ほど紹介した保

井コノさん、黒田チカさん、成田順さん、折原さださんら、ロールモデルとなる母校の卒業生が、教師として身近にいました。そして、卒業後は、東京大学の建築学科や前川國男建築設計事務所などで機会を得ました。

第三に理解者、協力者、仲間の存在です。浜口さんが建築の道に進むことを認めた両親、前川國男建築設計事務所での出会い、後に夫となった浜口隆一など、周りには良き理解者がいました。

そして第四に社会構造（社会の共同体としての責任）です。社会は大きなキーワードです。アメリカの政治学者アイリス・ヤングは「社会とそこに暮らす多様な人びとの未来に貢献する」と言っています。(註) 例えば、津田梅子は生物学者でもありましたが、当時の科学界は男性が支配していたため、その道を諦めて女子教育に邁進しました。先ほど少し紹介した土浦信子さんも、女性が建築家として働くには「時代が早すぎた」と言っています。この方については、またいつか機会があればお話ししたいと思います。

1913年に、東北帝国大学に黒田チカさんが日本で初めての女子学生として入学した頃、第一期フェミニズム運動が起こりました。そのような時代を経て、1933年に浜口さんが東京女子高等師範学校に入学します。その後、第二次世界大戦を経て、住宅難の時代となり、官による住宅政策という大きな動きがありました。そうした中で、公団住宅の台所の設計に浜口さんを招いたのは、公団住宅の初代課長、本庄和彦氏でした。そして、サンウェブという産の技術との協働によってダイニングキッチンが完成します。さまざまな要素が絡み合っってイノベーションが生まれたと言えるのではないかと思います。

❖ 未来は予測できないが、未来に「つなぐ」ことで何かが起こせる

この三月に、ノーベル・プライズ・ダイアログ「The Future of Life 生命の未来」先端技術とわたしたちのこれから」というイベントが横浜で開催されました。これは、世界各国のノーベル賞受賞者や著名な研究者、有識者が一堂に会し、語り合うものです。そこで彼らが異口同音に言っていたのは、「自分の関心に従って研究をしていただけであり、ノーベル賞を取ろうと考えて、研究をしていたのではない」ということでした。自分が現在、課題だと考えていることを解決したいと思って20年、30年と研究を続けていたら、結果としてノーベル賞を受賞したということでした。とてもいい話だと思いました。

未来はそれほど簡単には予測できません。でも、未来につないでいくということは、私たち教育界に身を置く者にとつては、とても大事なことだと考えています。

今や、キッチンが、女性が働く場から家族皆で使う空間へと変化しましたが、これは、浜口ミホさんの存在抜きにはありえませんでした。

高橋真理子氏が、第一線で活躍する女性研究者28人に取材したインタビュー集『科学に魅せられてー女性研究者という生き方』（日本評論社、2024年）では、「学術界の男女平等は、家庭でのタスク分担の意識革命があって初めて実現した」と指摘されています。

最後になりましたが、私が浜口さんを知ったのは、彼女が設計した住宅が、2022年にリノベーションされて「津田山の家」として受け継がれたという話がきっかけでした。

この家を発見したのはスイス連邦工科大学チューリッヒ校で浜口さんの研究をしていた上田佳奈氏

です。上田氏は、この家を取り壊される寸前であることを知ると、東京工業大学（現東京科学大学）建築学科の塚本研究室で、現代日本建築のジェンダー研究をしているノエミ・ロボ氏に連絡をとり、現状を伝えました。

そうすると、素敵なことが起こりました。ノエミ氏の指導教員である塚本先生のご尽力でこの家が <sup>\*24</sup>DOCOMOMO Japan の 2022 年度選定建築物に指定され、「日本の近代建築史を語るうえで重要なマスターピース（傑作）」として保全されることが決定しました。その後、塚本研究室、アトリエ・ワン、株式会社 ZENGO によって改修され、「The Japanese House Revolution of Miho Hamaguchi」と言われています。

未来への課題としては、やはり、社会規範が変わっていかねばならないのではないかと思います。いろいろなところで耳にすることですが、男女別の一日当たりの労働時間、女性管理職の割合、フルタイム労働者の男女賃金格差など、まだまだいろいろな課題があります。旧体制はまだ未清算なのではないかとも言われています。また、高度経済成長の象徴であった団地の老朽化、加えて、住民の高齢化に伴う再整備の必要性という問題もあります。さらには、家族団らん の形も変わってきていると思います。

さまざまな変化の渦中にある私たちの、「すべての人びとのウェルビーイングを実現するためのイノベーション」について、皆さまとともに考えていけたらと思っています。ご清聴ありがとうございました。

\*24 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement) 20 世紀の建築における重要な潮流であったモダン・ムーブメントの歴史的・文化的重要性を認識し、その成果および価値を調査・記録するとともに、それにかかわる現存建物・環境の保存を訴えるために、1988 年に設立された国際学術組織。

DOCOMOMO japan Web サイト <https://docomomojapan.com/>

参考文献

- (1) ロンダ・シービング「ジェンダード・イノベーションの新たな展開」小川真里子・鶴田想人・弓削尚子編著『ジェンダード・イノベーションの可能性』明石書店、2024
- (2) 北川圭子『ダイニングキッチンはどうして誕生した 女性建築家第一号 浜口ミホが目指したもの』技報堂出版、2002
- (3) 上田佳奈「人間のための建築、その哲学を貫いて」『建築ジャーナル』2023年2月号No.1339、2023
- (4) Noemi Gómez Lobo, Kana Ueda, Diego Martín Sánchez “Transcultural Dwelling: Japan’s Pioneer Architect Miho Hamaguchi and her last Project in Spains.” ZARCH 18 (June 2022): 42-57. ISSN print version: 2341-0531 / ISSN digital version: 2387-0346. 2022
- (5) 濱口ミホ『日本住宅の封建性』相模書房、1949
- (6) 西山卯三『すまい考今学 現代日本住宅史』彰国社、1989
- (7) 小川信子・田中厚子『ビッグ・リトル・ノブ ライトの弟子・女性建築家 土浦信子』ドメス出版、2001
- (8) Kweilin Ellingrud, Lareina Yee, Maria del Mar Martinez. *The Broken Runge: When the Career Ladder Breaks for Women-and How They Can Succeed in Spite of It*. Harvard Business Review Press. 2025
- (9) (6) に同<sup>2)</sup>
- (10) 古川安『津田梅子：科学への道、大学の夢』東京大学出版会、2022
- (11) Iris Marion Young, *Responsibility for Justice*, Oxford University Press, 2011. 岡野八代・池田直子訳『正義への責任』岩波書店、2022



## 第2部

発表1 「ふるまいはあいだに生まれる」

塚本由晴 東京科学大学院環境・社会理工学院教授／アトリエ・ワン共同代表

発表2 「Shared Space・間のデザイン」

藤山真美子 お茶の水女子大学共創工学部准教授

# 「ふるまいはあいだに生まれる」

塚本由晴

東京科学大学大学院環境・社会理工学院教授／アトリエ・ワン共同代表

ふるまいを提唱して、建築デザインのエコロジカルな転回を推進。

浜口ミホの設計した家を塚本研究室とアトリエ・ワンが改修設計を行った。



ご紹介にあずかりました塚本です。このたびは、お茶の水女子大学創立150周年、おめでとうございます。本日は短い時間ですが、「ふるまいはあいだに生まれる」というタイトルで話をします。

この「ふるまい」という言葉は、私と貝島桃代が共同で代表を務めるアトリエ・ワンで、ずっと言い続けていることです。建築の設計とは、さまざまなふるまいに相応すること、それらの均衡をつくり出すことです。つまり、一つのふるまいが他のふるまいを抑圧することなく、皆がいきいきとするような状態をつくり出すことです。

ここでいうふるまいには、人間だけではなく、光や風、水、熱のようなものも含まれます。こうした自然の要素は、物理の原理でふるまっています。それから建物も、長い目で見ればふるまっています。

す。町並みはどんどん変わっていきます。違う町に行けば、違う建物が町並みをつくっています。このようなこともふるまいであると言えます。ただし、それぞれのリズムは違います。

ふるまいの良いところは反復することです。反復しなければ、ふるまいとしてなかなか認識することができません。反復するからには、時間の尺度や感覚が入ってきます。ですから、単純にある瞬間が最高に美しいというものではありません。ふるまいとして継続的に繰り返される中で、美しさや心地よさ、あるいはストレスのなさが生まれ、続く、この点が大事だと考えています。

最初に、今回お招きいただくきっかけになりました浜口ミホ設計のG邸、その後「津田山の家」と呼ばれるようになった住宅の紹介をしたいと思います。この家は、その名のとおり、東急田園都市線の津田山駅近くの山の上にあります。津田山という名の由来は、当時の多摩川電気鉄道社長の津田さんが前に入って開発したことによるもので、富士山もよく見える所です。

この家は、元の住まい手が登山家だったことから、山小屋風に設計されました。浜口さんが前川國男建築設計事務所を出て、しばらくしてからこの作品ですが、前川事務所の影響が見られます。例えば、このひさしに見覚えのある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。上野の東京文化会館と同様の特徴を持っています。

(図1)。



図2



この家は、山の斜面地に建っているため、敷地が2段になっています。道路に接している部分は、実は地下で、上の庭に接している部分が1階です。地下はピロティ形式になっており、手前に車を止めて玄関に入り、軽やかな階段で上階へ上がり（図2）大きな窓のある居間とダイニングキッチンに至ります（図3）。キッチンに関しては、新しいオーナーに、「これは浜口ミホのステンレス製流し台のキッチンなのでから再利用されたらどうでしょう」とお勧めしたのですが、意中のシステムキッチンがあるということで、私が里山再生を手掛けている千葉県鴨川市釜沼集落の納屋に、一旦避難させました。その後2年ほどして、神奈川県で、台所、風呂、

図3



トイレなどの文化史的研究をされている須崎文代先生から、研究室に設置したいというお申し出があり、お譲りしました。

建物の断面図はこのような形で、庭から少し高くなった居間は、明るく、天井の高い吹き抜けになっています（図4）。その高さいっばいに綺麗な緑色のタイルで仕上げた壁に沿って、階段が子供部屋のあがる2階へ向かいます。2階は完成当時は半分の大きさでしたが、すぐに増築されたようです。改修のため天井を剥がしたときに、新しい屋根を架けるために加えた鉄骨のトラス梁が出てきました。ここは男の

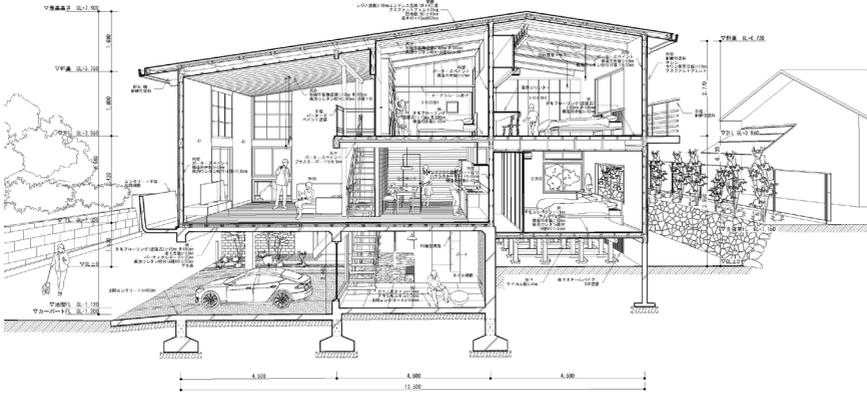


図5



図6

子二人の部屋という想定でしたので、インダストリアルな感じをそのまま残してあります(図5)。

総じて、山の斜面ならではの段差、レベル差をうまく利用して、開放的でありながら、道路から中の生活が見えないという非常に上手な設計がなされています。

さらに、家事動線の効率化もよく考えられていて、家事の中心であるキッチンや洗面所などの水回りが家の真ん中にまとめられていました。また、主たる玄関とは別に、ご用聞きの人用の裏口がありました。ただ、階段が急ですので、ビールのケースや米袋を担いで上がるのは、かなり大変だったのではないのでしょうか。

リビングルームのタイルは、真ん中がへこんだ凹面になっており、その部分の釉薬が厚くなつてひびが入る、貫入という焼き方で作られ、水をためたような、とてもきれいなものです。そして、同じ壁の裏のキッチン側には、土系の色がそのまま現れたタイルが使われていて、こちら側は火を使う空間であることを、タイルで表現したのではないかと私は理解しました(図6)。

ふるまいというものを、さまざまな形で展開し、研究や作品創作に利用していく過程で、私は継続的に本にまとめてきました。2014年に出版した『コモナリティーズ ふるまいの生産』(LIXIL出版)では、公共空間を取り上げました。

それぞれの地域に、人々が楽しんでいる公共空間があります。しかし、それは与えられたものというよりは、そこに住んでいる人たちが自分たちのふるまいによって占拠し、長らく使い続けてきた、いわば地域の文化と言えるような使い方です。それらを集めて紹介しているのが、この本の主な内容です。「コモナリティーズ」とは共有性です。20世紀の建築界では、共有性よりも個人性や公共性に軸足が置かれていました。個と公、プライベートとパブリックはありましたが、その間の共有、コモ

ンという部分はずいぶん弱体化されたという印象を私は持っています。

明治時代にさかのぼると、政府にお金がかつたため、どのように税金を取るのかが大きな問題でした。当時は、「共有地」というものが日本中にあつたのですが、これをそのままにしておくと、地域ごとの独自のルール、独自の規範が残り、国家としてのルールが浸透しないという問題がありました。さらに、その土地の不動産や生産物に税金を課しにくいという問題もありました。そこで、共有地を、個人のもの、もしくは公共のものに区分することになったのです。

近代化以降の建築の設計は、法律の上にあります。現在の建築基準法ができたのは戦後ですが、その前にも建築についての法律はありました。そのため、建築の思考そのものが財産についての法的な定義、すなわち公と私に分離した社会を前提にしたものにならざるを得ません。しかし、建築というものは連綿と人間が頼りにしてつくり続けてきたものなので、必ず共的な部分、コモンな部分があると、私は考えています。それがなくなると、お金の切れ目が縁の切れ目のような社会になり、すぐに放り出されて路頭に迷うしかないわけです。「苦しい状況でも我々がいるぞ」という形で守ってくれらるというか、傍らにいてくれる。そういう建築の包摂的な姿をもう一度、取り戻していかなければいけないと私は考えて、さまざまな場で共有性を強く訴えてきました。

それをうまく見せる一つの方法として、人々のふるまいがあります。いまだに資本も全部は取つてはいけないし、必ず人々の側にあるものとして、まだある程度、共有されています。ここをきつかけに、建築を組み立て直したいという思いで書いたのが、『コモナリティーズ』です。その中で注目しているのは、必ずしも建築物だけではありません。公共空間とは人々のふるまいが展開していく場所です。

例えば、東京科学大学大岡山キャンパス（旧・東京工業大学）の本館前には、桜並木が見事なプロ

ムナードがあります(図7)。老木になって寿命を迎えると、代わりに若い木が植えられていきます。私が准教授のときに、学内の委員になり、そこにデッキを造りました。

ここはもともと大勢の人が集まる場所ではありませんでしたが、デッキを造ったことにより、ますます集まるようになりました。実は、この桜の下で花見を始めたのは80年代後半に坂本一成先生の研究室にいた私と仲間たちです。元はデッキがなく、地面がはじめじていたので、誰も花見をしていませんでしたが、私たちが段ボールを敷くなど工夫して花見を始めたところ、だんだんそうする人が増え、それがデッキの設置にまでつながったので、私はとても嬉しかった。でも人が集まり過ぎてごみの山ができ、勝手に校舎のトイレが学外者にも使われるようになりました。さらに救急車騒ぎがあったため、最終的には、キャンパス全域で飲酒が禁止されてしまいました。私はとても良いことをしたのに、結果的には自分の楽しみが削られることになってしまい残念でした。

話が脱線しましたが、この事例から何を言いたいのかといえますと、花見というのは年に1度の桜のふるまいと飲む・食べるといふ人の毎日のふるまいが重ねられているということです。そうすることによって、春の到来を皆で祝うのです。大学が「花見をするから集まってください」と声を掛けた



図7

わけではなく、皆、知っているから自分からやって来ます。これは豊臣秀吉が催した吉野の大花見会あたりからずつと繰り返されてきたふるまいです。

続いてお見せするのは、コペンハーゲンにある橋に、夕方、人々がたむろして、欄干に背中を預け、日が沈むのを眺めているところです(図8)。私が行ったのは9月半ばで、夕方になると涼しいので、自転車で乗っている人は長袖のジャケットを着ていますが、橋に座っている人たちは半袖姿で、ビールを飲んだり、ギターを弾いたりしています。ここで起こっているのは、日中温められた石の欄干の熱が夕方になって放出され、人々がその熱を背中で感じながら、夕日を楽しんでいるということですが、別にコペンハーゲン市が企画したわけではないのに、こういうふるまいが自然と起こり、繰り返されるようになったのです。そこで、市は、車道を4車線から2車線に減らしてその分歩道を拡げる整備を行なったそうです。

ここでは、太陽のふるまい、石を介した熱のふるまい、人のふるまいが重なっています。このようなふるまいの連携、コーディネートションが建築的知性の始まりではないかと思えます。この事例はまだ建築と言えるものにはなっていませんが、このようなふるまいの重ね方が繰り返されるうちに徐々に建築になっていくと考えています。



図8

Norrebrogade, 6pm, Summer, Copenhagen

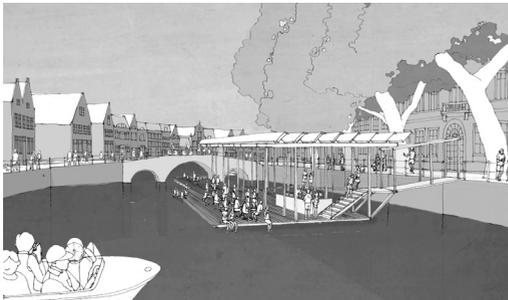
続いて、2015年にベルギーのブルージュで行った「カナル・スイマーズ・クラブ」というプロジェクトをご紹介します(図9)。(これは「ブルージュ・トリエンナーレ」という、3年に1度、町全体を会場として開催される芸術祭の展示物の一つでした。

建築前に、どのようなことが起こるのかを想定して描いた完成図の下には『Peoples behavior tells the water quality』と書きました。水の質自体は見ただけでは分かりませんが、人が泳いでいればきれいな水だと皆思うだろうと考えました。

我々がここで行ったのは、展示物をつくるというよりは、皆で使えるような公共空間をつくる「マイクロ・パブリック・スペース」というプロジェクトです。これは、人々のふるまいを活性化させるための最小限のデバイスを町の中に挿入し、実際に使ってもらおうという試みです。ただ、実際に出来上がったのが5月で、水温が11度だったので、さすがに誰も泳ごうとしませんでした。それで「どうやって使うか見せなくてはいけない」ということになり、共同制作してくれた地元の建築家たちと



図9



People's behavior tells the water quality.

一緒に飛び込みました。そして6月になると非常に暑くなったので、高校生たちが泳ぎ始めて、大人気になりました。それまでは、汚い水の中で泳いでいるという目で見られていましたが、皆が泳ぐようになり、ブルージュの夏の風物詩になりました。

実は、1970年代後半までは、人々は夏になると運河で泳いで楽しんでいて、運河は、夏の間の広場としての役割も果たしていたのです。しかし、13世紀頃に都市としての形を完成させたブルージュは、下水道がきちんと整備されていなかったため、20世紀になると家庭排水が運河に流れ込み、水質が非常に悪くなりました。それで、1978年に市が泳ぐのを禁止し、以来、2015年まで誰も泳ぎませんでした。

その間に下水道の整備が進み、水質は改善されていたのですが、心の壁があり、誰も飛び込もうとしなかったのです。一人で泳いでいると「あいつは馬鹿だ」と言われるかもしれません。100人ぐらいで泳いでいると、「わー、楽しそうだな」ということになるでしょう。そこで、どうやって100人ぐらいが泳ぎ始めるような場をつくるか？ということとで考えたのが浮棧橋のようなものです。飛び込みやすいところ、泳いだ後で甲羅干しができる場所をつくりました(図10)。

ブルージュの運河は、13世紀頃には国際港として大変栄え



図10

ていました。その後、船がだんだんと大型化したため、内陸にあったブルージュは、国際港としては使えなくなり、金融経済に移行して、先物取引や株などで富を得ます。フランドル派の画家を生み出した芸術の中心地としても知られており、美術館もいくつかあります。そうした経緯があり、ブルージュは、街全体が世界遺産に登録されました。

護岸に生えている雑草の中には、国際港時代に、南アメリカから運ばれてきた外来種が今も生き続けています。これはかつてブルージュが国際港であったことを示すものなので、護らなくてはいけない、protected plants（保護植物）に指定されています。

ブルージュは、市壁を兼ねた運河に取り巻かれていて、街の中央には大きな鐘楼とマルクト広場があります。商業都市としての性格が強いのですが、世界遺産に登録されて以来、人口10万人の街に100万人の観光客が訪れるようになり、広場は観光客に占領され、カフェのコーヒー杯もたいへん高額になってしまいました。そうした中で、運河に誰でも泳げる新たな公共空間をつくるのは、とても意義のあることでした。

なぜ内陸に位置するブルージュが港町になったかという点、12世紀に川津波が遡上して、戻っていくときに川を削り取っていったのを運河として整備して、船が出入りできるようにしたのだそうです。ですから、今のブルージュの姿は、計画してできたのではなく、「たまたま」が重なったものであり、私が設計したカナル・スイマーズ・クラブの浮栈橋も、その連続の中にあるものなのです。その点をもう一度きちんと考えなくてはいけないと思っています。

建築は、どちらかというと、未来に向かって計画していくものと考えられており、その見たことのない光景を空間として提示していくのが役割であるというイメージが強いのですが、実はこれは、か

なり20世紀的な発想です。これからはむしろ、少し戻るぐらいの気持ちで、どうしてこうなってしまったのか、どうして今ここにいるのか、もしかしたら別の道にいった方がよかったのではないかといい、ここまで至った経路をきちんと理解したうえで、次の一步をどう踏み出せばいいか、皆で考えるように仕向けることが大事ではないかと思えます。

さて、本日の私の話のタイトルは、「ふるまいはあいだに生まれる」でした。私自身、最初は「ふるまいは人が持っているものだと思っていたのですが、そうではなくて、ある環境と私たちの身体が出会う時、ある環境と光や空気の流れが出会う時、そこに生まれるものであって、「あいだ」にしか存在しないのではないかと考えるようになりました。

木村敏さんは、『あいだ』（弘文堂、1988年）というご著書の中で、「主体性はどこにあるか」と問いかけています。これはとりもなおさず、「生命はどこにあるか」という問いかけであり、「あいだ」にあるというのが、木村さんの考えです。私は、自分がふるまい学で言おうとしていたことに近いと思いつつ読みました。そして、ふるまいは、人が持っていると考えより、人や何かのあいだにあると考えた方が、より広がると気づき、最近は、そういう方向に考え方をシフトさせています。なぜその方がいいかと言いますと、先ほど申し上げた経路に対しての感覚がより研ぎ澄まされ、深まっていくからです。

環境とか、社会構造とか、そういうものに出会ってふるまいが生まれ、それが繰り返されると、今度は「ロックイン」といって、鍵をかけたようにして、その方向にしかいかないような体制ができあがっていきます。それを元に新たな環境や社会構造がつけられていって、それに出会って、またふるまいが生まれる。それが反復されて、新しい環境や社会構造をつくっていくと考えられます。

ふるまい学でいうところのアクター、すなわち自然要素・身体・建築などが、資源・環境・構造と出会うことよって、このあいだにふるまいが生まれる。それが何度も繰り返されるうちに、ある種の形式が発生し、定着していく。それを第一世代としますと、次の世代は、第一世代が生み出した資源・環境・構造に出会い、そのあいだにまたふるまいが生まれる。そうすると、また形式の発生・定着が起こって、第二世代の資源・環境・構造になっていく。そこにまた、自然要素・身体・建築が出会ってふるまいが発生し、形式が生産される。これがずっと続いていくわけです(図11)。

では、資源・環境・構造とは何かというと、空間の概念で予め計画されたものではなくて、経路依存によって形成された事物連関であると考えています。フェミニズムの文脈では上野千鶴子さんが経路依存について発言しています。例えば日本の「男ばかり底上げ社会」は経路依存的に生み出された。このため、経路依存性自体が良くない

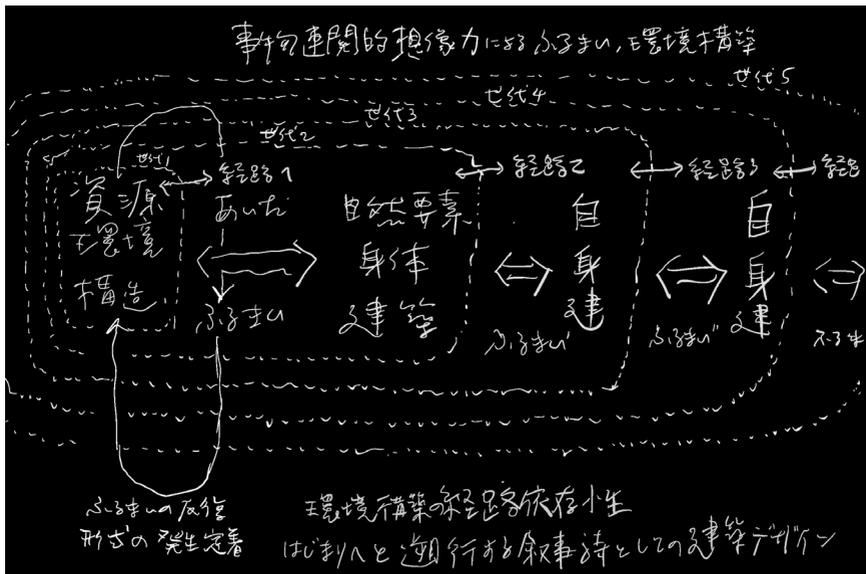


図11

ように聞こえてしまうのですが、東京のいろんな特徴のある現在の街の姿も、誰かが思い描いて計画したものではなくて、経路依存的にしかできていません。ですから経路依存についての想像力や言語を持たなければ、その複雑さや豊かさを単純化せずに、次の一步をどう踏み出すか考えることはできません。それができるかどうかによって、次世代の生きる環境や構造が変わってくると思います。ふるまい学を実践してきた私の今の関心です。

建築について説明する際も、遡行することを意識しています。例えば、先ほどのカナル・スイマーズ・クラブの説明も、あえて完成したところをお見せしてから遡りました。そうやって事実関係をしっかりと押さえていくことによって、抒情的ではなく叙事的になり、それがかえって詩のように美しくなる時があります。

ふるまいとは、人間だけのものではなく、他の存在、例えば、風、光、熱などと一緒に踊っているようなものです。詩的どころがありません。私はそこにふるまい学の叙事詩的な語りがあり、私の建築デザインはそういうものになっているのではないかと思っています。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

## 「Shared Space・間のデザイン」

藤山真美子 お茶の水女子大学共創工学部准教授

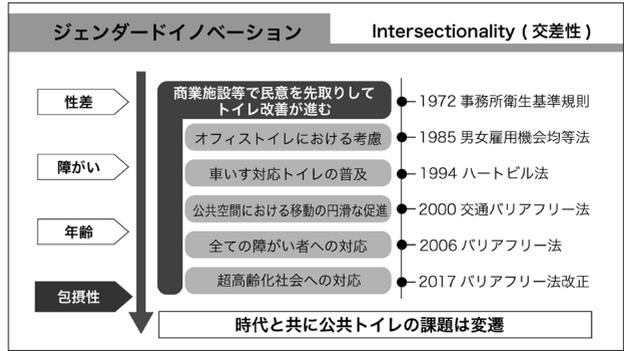
ジェンダード・イノベーションと交差性の視点から従来の都市・建築デザインを検証し、包摂性の高い空間形成の創造にむけた研究を進めている。



私からは、ジェンダード・イノベーション研究所で進めている研究を紹介した上で、「Shared Space」間（あいだ）のデザイン」という二つのキーワードについて話していきたいと思います。二つ目の「間のデザイン」というキーワードについては、本日のシンポジウムに先立って、私の考えていることをあらかじめ塚本先生にお伝えしたところ、「間」というキーワードがあるのではないかとご示唆をいただき、考えを深めたという経緯があります。

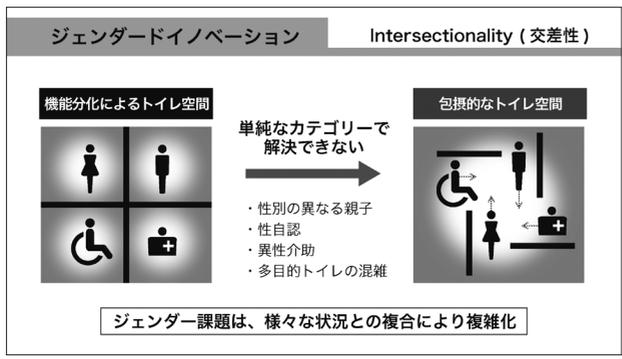
私は、都市・建築デザインを専門にしておりますが、ジェンダード・イノベーション研究所での活動を進めるにあたって、普段皆さんが使っている空間の中で唯一、性差で分かれていると言っても過言ではないトイレ空間に、まずは着目して、この領域の研究をはじめました。

図1



トイレ空間は、時代とともに、性差の解消や障がい、年齢に対する整備などが充実してきましたが、近年では、さらにジェンダーやセクシャリティーなどの包摂性に関する課題も議論され始めています(図1)。例えば、「オールジェンダートイレ」といった言葉を用いたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

図2



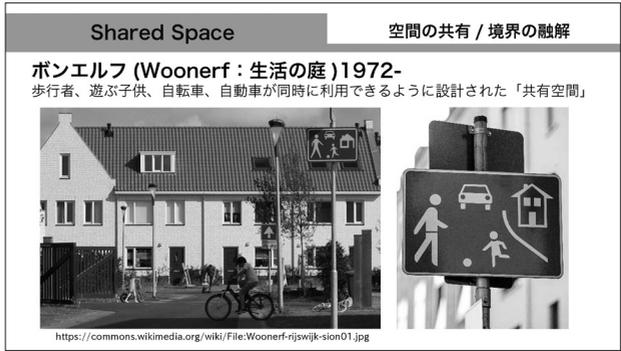
ば、小さな女の子を連れただお父さんのような性別の異なる親子、性自認の課題を抱えている方、異性介助を受けている方などが男女のトイレ区分を利用する際の難しさです。

さらに、これら男女のトイレ区分の利用に難しさを持つ人々の受け皿として、多目的トイレへの依存も高まっており、多目的トイレ

の混雑により、車いす利用者の不便が生じるケースも生まれています。このように、トイレ空間のジェンダー課題とは、さまざまな立場での状況が多様に存在することそのものであり、一様に捉えきれない課題の複雑性が、性別を問わずに利用できるトイレデザインなどのニーズにも繋がっていると思われ、研究を進めています(図2右)。

これら利用者の多様な状況を見つめる枠組みとして、「Intersectionality (交差性)」という言葉があります。ジェンダード・イノベーションの思想においても、この交差性の視点が根幹にあり、課題が、単純で単一の分類では定義できない複雑性を持つことを表しています。交差性の視点とは、すべての人々が、様々な交差した社会的立場を持つことを認識し、差別や不利益な課題を構造的に理解しようとする枠組みです。私たち一人一人が、性差、ジェンダー、年齢、セクシュアリティ、障がい、経済的状况などによって、それぞれに交差した社会的立場を持つという交差性の視点は、トイレ空間における課題だけでなく、包摂的な都市・建築空間全般を考える上でも、あらかじめ想定される利用者属性や、カテゴリーに依拠した空間の在り方を考え直す重要性や可能性を示唆してくれると感じています。

では、交差性を念頭においた時に、どのように都市や建築のデザインを開いていけるのか?それを考えるうえでヒントになるのが、本日の一つ目のキーワード「Shared Space」です。私は学生時代に、オランダの研究をしていました。国土の多くが海抜下の干拓地であるオランダの文化は、限られた大地に、人工環境を自ら切り開いてきたという点で、非常に特徴的な考え方を持っており、そのひとつが Shared Space です。Shared Space の代表事例のひとつとして「ボンエルフ (Woonerf 生活の庭)」という街路デザインがあります。



車は車道規定を順守することで、何も考えずに利用者は空間を使うことができます。それに対し、ボンエルフでは、車の運転手は歩行者の様子を確認しながら、且つ低速で運転しなければなりません。また、歩行者は、車が来たときには遊んだり、会話をしていた場所から移動しなければなりません。このように、車と歩行者が互いに、

ボンエルフは、写真にもあるとおり、歩行者、遊ぶ子供、自転車、自動車などが同時に利用できるようデザインされた街路です。その標識からもこのデザインのユニークなコンセプトが感じられます(図3)。元来、住宅前の街路は、人々が話をしたり、遊んだりする「共有空間」でしたが、時代とともに、いつしか自動車に占有され、歩行者の活動も制限されてしまいました。そこで、その失われた場所性を、再度取り戻そうというアイデアがボンエルフです。

ボンエルフでは、歩行者空間と車道が区分された、歩車分離の考え方をあえて取り払い、Shared Spaceの試みが行われています。従来の歩車分離では、歩行者が歩道規定を順守し、

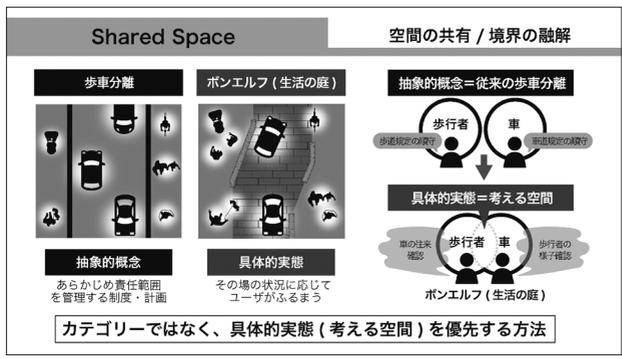


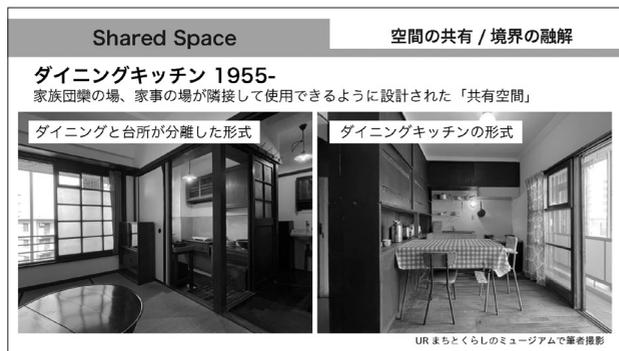
図 4

歩行者、遊ぶ子供、自転車、自動車に占有され、歩行者の活動も制限されてしまいました。そこで、その失われた場所性を、再度取り戻そうというアイデアがボンエルフです。

場面ごとの状況に対応しながら共同するという空間の在り方がボンエルフという空間です。

つまり、歩車分離が、あらかじめ制度・計画によって責任範囲を管理する「抽象的概念」による空間であるのに対し、ボンエルフという Shared Space は、その場の状況に応じてユーザーがふるまうことで、街路空間の利用可能性を最大化しようとする「具体的実態」のための空間的試みであると言えます。このような空間の構造は、カテゴリーではなく具体的実態、つまり制度・計画による固定的な空間の在り方ではなく、利用者自身および利用者相互が考える空間を開いていくという点に、デザイン手法としての可能性があるのではないだろうか（図4）。

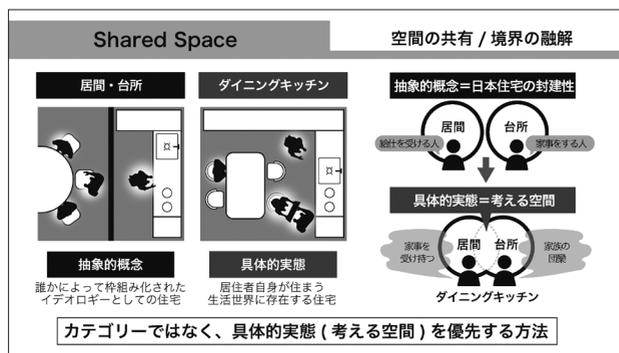
さらに、本日のテーマである、浜口ミホさんが普及に貢献したダイニングキッチンに関しても、同様の捉え方ができるのではないかと思います。日本の封建的な住宅では、居間と台所は区分されていましたが、浜口さんは、この状況に課題を捉え、居間と台所が一体化した Shared Space によって新しい時代の生活環境を切り開こうとしたと言えるかもしれません（ダイニングキッチンという言葉は戦後に日本住宅公団によって名付けられました。浜口ミホさんは戦前から、西欧のヴォーン・キュッヘと呼ばれる居間と台所が一体化した空間を提案していたとされます）（図5）。浜口さんは、著書『日本住宅の封建性』（1949年）でも述べられているとおり、誰かによって枠組み化されたイデオロギーとしての住宅、つまり、

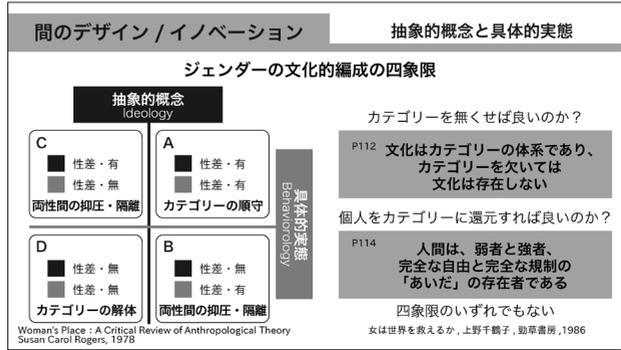


抽象的空間としての家を否定しました。代わりに、居住者自身が住まう生活世界に存在する住宅、具体的実態としての暮らしを大切にされてきました。この時代の封建的な日本住宅では、居間に給仕を受ける人（当時は主に男性）がいました。そして、台所には家事をする人（当時は主に女性）がいて、家族が、その空間区分とともに、自身の役割を無意識に享受していたのではないかと思います。これに対して、ダイニングキッチンとは、思い切って居間と台所を一カ所の空間に統合しました。このダイニングキッチンという Shared Space によって、家族同士が、お互いの様子やその空間全体を見ることができるようになり、今日は、誰が家事を受け持とうか、どのように家族団らんを楽しみ合おうかと考える空間になったのではないのでしょうか(図6)。ダイニングキッチンという空間の創造は、それによって起こった人と人、人と空間の在り方がもたらす互いの発見が非常に重要なポイントだと思えます。つまり、固定的なカテゴリーによらない具体的実態、すなわち利用者自身で「考える空間」を開いたという点こそが、ダイニングキッチンがイノベーションたる所以ではないかと感じています。

最後に、二つ目のキーワード「間のデザイン」についてお話しします。文化人類学者のスーザン・キャロル・ロジャースの「Woman's Place」(1978年)という論文のジェンダーの文化的編成の四象限という考え方を紹介したいと思います。この論文では、私たちの世界には、性差に対して社会が規範として持っている抽象的概

図6



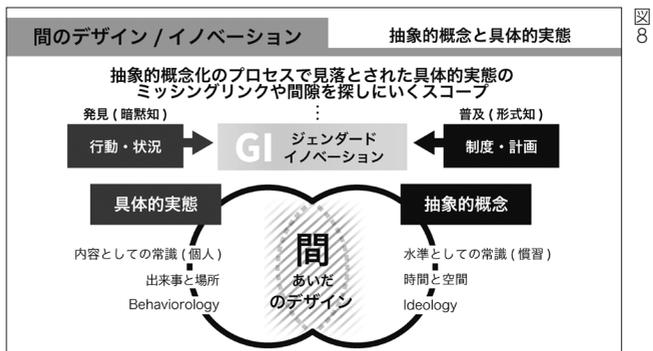


念「Ideology」と、生活の中で実際にふるまっている具体的実態、「Behaviorology」があることが示されており、この二つの軸が交わってできる四象限によって、歴史や時代、状況におけるジェンダーの特徴を説明しています（図7）。

その中で、私が注目したのは、抽象的概念においても具体的実態においても性差がないという、Dの象限です。これは一見、理想的であるようにも思えますが、上野千鶴子さんは著書『女は世界を救えるか』（1986年）の中で、この論文を紹介し、抽象的概念においても、具体的実態においても、性差がないことは「カテゴリの解体」であるとして、疑問を投げ掛けています。さらに、カテゴリは、社会の課題を生む一方で、アイデンティティーにもなりえるものであり、性差の課題に対してカテゴリをなくせばいい、という単純な話ではなく、「文化はカテゴリの体系であり、カテゴリを欠いては文化は存在しない」とも述べています。さらに、文化にとつてカテゴリが必要不可欠であるならば、カテゴリに個人を還元すればいいのかというと、そうでもなく、個人をカテゴリに還元する危うさについても、慎重に指摘されています。そして、「人間は、弱者と強者、完全な自由と完全な規制の「あいだ」の存在者である」と書かれています。つまり、私たち人間は、この四象限のいずれにも属さず、その間を揺らぐような存在であると指摘しているのだと、私は理解しています。

この、私たちが、完全な自由と完全な規制の「あいだ」の存在者であるとの指摘は、都市・建築デザイン分野に置き換えて考えると、完全な自由とは、具体的実態つまり「行動やデザイン」であり、完全な規制とは、抽象的概念つまり「制度や計画」と捉えられるのではないのでしょうか。私は、ジェンダード・イノベーションの研究を始めてまだ3年ほどですが、まさにこの抽象的概念と具体的実態という二つの間をどう考えるのかということが、自身が専門とする都市・建築デザイン分野のテーマであり、時代ごとの制度や計画などの抽象的概念化のプロセスの中で見落とされた具体的実態のミッシングリンクや間隙を発見するためのスコープになると考えています。つまり、「Shared Space」や「間のデザイン」をどのように考えていくかということが、ジェンダード・イノベーションそのものではないかと思っています（図8）。

これで私の発表を終わります。ありがとうございました。





本日はお忙しい中、お茶の水女子大学創立150周年記念シンポジウム「イノベーションはどのように創られるか」お茶の水女子大学の歴史から考える」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

お茶の水女子大学は、2025年11月29日に創立150周年を迎えます。本学は、1875年に、日本初の女性のための高等教育機関、東京女子師範学校として創立され、以来、卒業生たちが日本国内のみならず世界を舞台として、さまざまな分野で活躍してきました。本日はその中から、日本初の女性一級建築士となった浜口ミホさんを取り上げ、「イノベーションはどのように創られるか」をテーマとして、シンポジウムを開催しました。

佐々木学長の基調講演は、東京女子師範学校における家事学の学びを切り口として、イノベーターとしての浜口ミホさんを、現代に生き生きとよみがえらせ、イノベーションの創造に関する示唆に富んだものでした。

浜口さんは、ご著書の中で、家族内での身分を反映したような薄暗い台所で料理を作っていた女性の側から見た、日本住宅の封建性を指摘するとともに、システムキッチン、ダイニングキッチンの開発に多大な貢献をされました。

お話を伺いながら、私たちが普段何気なく使っているキッチンには、長い歴史があり、それは日本

の家族のあり方の歴史でもあると実感しました。ダイニングキッチンには、台所の利便性だけでなく、家庭における女性の地位の向上にも大きな影響を与えました。それはとりもなおさず、時代に先駆けて、産官学の共創によるイノベーションを実現するものであったことを、ご理解いただけたのではないかと思います。

続いて、東京科学大学の塚本先生からは、桜のふるまい、人のふるまい、太陽のふるまい、石のふるまい等の「ふるまい学」のご講演をいただきました。私は、ふるまいの主語は人とか生き物だと思っていたので、あらゆるものにふるまいがあり、それが繰り返されることが美しさとなっていくというお話は非常に印象的でした。

また、ふるまいは「あいだ」に生まれるものであり、ふるまいが反復されて形式が発生して定着し、第一世代、第二世代と続いていくというお話は新鮮でした。同じように感じられた方も多いのではないかと思います。

本学の藤山先生からは、包摂的なトイレ空間を考えるための交差性を起点に、オランダのボンエルフという共有空間のご紹介がありました。必要に応じて使い方を考える空間である点が、本日のテーマである浜口ミホさんのダイニングキッチンと共通するところのご指摘が心に残りました。

このように、私自身にとりましても、本学の歴史と浜口ミホさんの活躍を通して、ジェンダード・イノベーションの重要性を改めて理解する機会となりました。ご参加くださった皆様にとっても実りの多い2時間であったことを期待して、閉会のご挨拶とさせていただきます。

ジェンダード・イノベーション研究所では、今後も様々なシンポジウムやセミナーを開催してまいりますので、引き続きご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

おわりに

石井クンツ 昌子

お茶の水女子大学理事・副学長／

ジェンダード・イノベーション研究所長

本書は2025年5月9日に開催したお茶の水女子大学創立150周年記念シンポジウム「イノベーションはどのように創られるか〜お茶の水女子大学の歴史から考える〜」の報告書ですが、広い読者層にアピールできるように心がけて作成しました。改めまして、ご登壇者、参加者、そして準備に関わっていただいた皆様には感謝申し上げます。

シンポジウムでは本学の卒業生で、日本初の女性一級建築士である浜口ミホさんに焦点をあて、イノベーションはどのように創られるかというテーマで佐々木泰子学長から基調講演をいただきました。東京女子高等師範学校における家事学の学びと浜口ミホさんの経験からイノベーションはどのように創られるかに関する大変貴重なお話でした。浜口ミホさんは家族内での身分の上下関係でしいたげられていた女性の経験をもとに日本住宅の封建性を指摘して、システムキッチンの開発によるダイニングキッチン誕生に多大な貢献をされた方ということがよく理解できた講演だったと思います。また、浜口ミホさんの貢献は単にキッチン革命にとどまらず、家庭における女性の地位向上にも影響を与えたものであります。

ジェンダード・イノベーションのアプローチは様々な形態を取りますが、本シンポジウムのように歴史上から産・官・学の共創例として、ダイニングキッチンを取り上げることがジェンダード・イノベーション視点を取り入れた研究としては稀な試みであったと思います。

第2部の講演では、都市・建築学の視点から、共有空間であるダイニングキッチンなどについてのご指摘やコメントをいただき、イノベーションとの関連性についてのお話もありました。建築学と家事学・家政学、家族社会学との関連についても貴重なご示唆をいただきました。

本学の歴史と浜口ミホさんの活躍を通してジェンダード・イノベーション視点の重要性を改めてご理解いただけた機会を提供することができたと思います。皆様にとっても実り多いシンポジウムであったことを願っております。

(参考) お茶の水女子大学&ジェンダード・イノベーション研究所  
創立 150 周年記念事業コラボレーション企画

<https://igi.cf.ocha.ac.jp/150anniversary/>

## 1. イベント

### ○ IGI セミナー

「責任」としてのジェンダード・イノベーション

【日時】 2025 年 1 月 29 日 (水) 9:30 ~ 10:30

【会場】 国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室

【講師】 鶴田想人 (大阪大学 社会技術共創研究センター 特任研究員)

### ○ 創立 150 周年記念シンポジウム

イノベーションはどのように創られるか〜お茶の水女子大学の歴史から考える〜

【日時】 2025 年 5 月 9 日 (金) 15:00 ~ 17:00

【会場】 共通講義棟 2 号館 201 室

【基調講演】 佐々木泰子 学長「ジェンダー格差・文化的位相・変容する世界にイノベーションを」

【パネリスト】 塚本由晴 (東京科学大学大学院教授)

藤山真美子 (お茶の水女子大学 准教授)

### ○ 創立 150 周年記念講演会

都市・建築デザインとジェンダード・イノベーション

【日時】 2025 年 6 月 13 日 (金) 14:30 ~ 16:30

【会場】 国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホール

【講師】 ノエミ・ゴメス・ロボ「ジェンダー視点からの建築的実践の再定義：浜口ミホのトランスカルチャーな住居」

## 2. 研究プロジェクト

### ○ 建築家・浜口ミホとジェンダード・イノベーション

Architect Miho Hamaguchi and Gendered Innovations

本研究プロジェクトでは、ジェンダード・イノベーションの視点から建築家・浜口ミホの歩みを跡付けることをとおして、女子教育・都市・建築デザインの視点からジェンダード・イノベーションについて考察する。

中国大連で生まれ、東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）で家事学を学んだ浜口の日本の住宅に関する考察は、『日本住宅の封建制』（1949）という書籍として発表されている。それに基づくキッチンの設計は、住宅という環境を変化させることで、そこに住む人々の意識、さらには社会の変容を迫るイノベーションであった。またこのイノベーションは住宅建築と提供に携わった当時の行政、産業界、そして浜口との協働によって実現した。

お茶の水女子大学創立 150 周年という節目の年を起点とする、本プロジェクトでは、本学、さらには明治開化期以降の女子教育の歴史も振り返りつつ、未来に向けたイノベーションについて考える。

【メンバー】 佐々木泰子（お茶の水女子大学長）  
藤山真美子（お茶の水女子大学共創工学部准教授・IGI 研究員）

---

書名	お茶の水女子大学 創立 150 周年記念シンポジウム イノベーションはどのように創られるか ～お茶の水女子大学の歴史から考える～
発行日	2026 年 2 月 1 日
編集・発行	国立大学法人 お茶の水女子大学 ジェンダード・イノベーション研究所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2 丁目 1 番 1 号 お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科棟 5 階 507 室 E-mail ocha-igi@cc.ocha.ac.jp URL <a href="https://igi.cf.ocha.ac.jp/">https://igi.cf.ocha.ac.jp/</a>
表紙写真	津田山の家 玄関
表紙写真提供	塚本由晴
編集協力	特定非営利活動法人 お茶の水学術事業会

---

※本書の内容の全部または一部を、無断で複写・複製・転記したり、磁気または光記憶媒体へ入力することは禁じられています。



## 創立150周年記念事業シンボルマークのご紹介

〈コンセプト〉

お茶大の歴史を代表する正門には、明治時代の女学生。女子教育の先達として道を切り開いてきた150年、女学生はこれからも全ての人が幸せに暮らせる社会の実現を目指し、未来を指差している。

これは同時に、お茶大がいつの時代も女子大として最高峰にあり、優秀な女性を育てているという自負と誇りを示した1本指でもある。女学生と150の文字をつなげ、150年を迎えたあとも、その姿勢は引き継がれていくという願いを込めている。

制作・・・山本千智さん（お茶の水女子大学文教育学部）

※創立150周年記念事業シンボルマーク最優秀賞

